

滋賀県文化審議会次世代育成部会第11回会議 議事録

- 1 日 時 平成28年12月16日(金) 14:00~16:00
- 2 場 所 大津合同庁舎7D会議室
- 3 出席者 委 員：辻委員(部会長)、木下委員、寺嶋委員、平松委員、南委員、  
山田委員(6名出席)  
事務局：森管理監、文化振興課田島課長、野瀬課長補佐ほか
- 4 議 題  
 (1) 部会長の選出について  
 (2) 次世代育成施策の実施状況について  
 (3) 県立文化施設における次世代育成施策の実施状況について  
 (4) その他
- 5 議事概要 以下のとおり
- 森管理監あいさつ
- 議題

	<p>議題1 部会長の選出について</p>
事務局	<p>部会長の選任について、滋賀県文化審議会次世代育部会成設置要綱第2の1に基づき、委員および専門委員の互選により新たに部会長を選任いただきたい。</p>
委員	<p>辻委員に前期に引き続きお願いしたい。</p>
全委員	<p>異議なし。</p>
事務局	<p>それでは、部会長は、辻委員をお願いします。</p>
	<p>議題2 次世代育成施策の実施状況について</p>
事務局	<p>(事務局より資料説明)</p>
部会長	<p>それぞれの専門分野等について、気付いたことがあれば意見をいただきたい。</p>
委員	<p>ホールの子事業は、高島や湖北の小学校の参加が少ないように思うが、これに対する対策や考えがあるのか。小学校の校長先生に話すと素晴らしい取組だと言われるが、実際には参加しない。何か良い方法はないかなど思っている。</p>

部会長	高島の小学校の参加は少ないのか。
委員	高島や湖北の小学校の参加は少ないと思う。
部会長	やはり大津まで遠いということか。
委員	校長先生と話したら、バス代が必要だと言われたので、補助があることを話した。そういうことも知られていない。
事務局	<p>ホールの子事業は、参加した学校から大変高い評価を得ている。目標は、県内の小学生全てが一度はびわ湖ホールに来ることだ。指摘のとおり、参加しない学校・地域がある。例年、各学校に意向調査等を行っているが、さらに、今年は、湖北を中心に、校長会に出向いたり、市町の教育委員会の担当課長や教育長と話をするなど、PR活動を行った。</p> <p>参加できない理由は、交通費の負担がある、大津まで行くことで一日拘束され授業時間が圧迫される、校外学習を組むのが通常秋である、また、市町の事業に参加するといったことであった。なるべく柔軟性をもたせて認識を高めていくことも必要かと思うが、それに加え、保護者を含めた、事業広報や琵琶湖博物館などとセットで校外学習をすることについてアピールしながら広めていきたい。遠方の学校については、もう少し何か出来ることがないか。引き続き考えたい。</p>
委員	実際にホールの子事業で生のオーケストラに接すると、是非、子どもたちを連れていきたいと思った。校長先生や先生が聞いたことがないというのが1番の問題で、まずは、校長先生や先生にびわ湖ホールに来て、生のオーケストラに触れて感動していただいて、諸事情を乗り越えてでも、子どもたちに聞かせてやりたいと思ってもらいたい。
委員	遠方だけでなく、大津の小学校も参加しているのか。この112校と言えば、県内の小学校数の半分では。
事務局	県内の小学校数の半分弱になると思う。大津の学校が全部来ているというわけではない。参加する学校が多い市町と少ない市町がある。大津の場合は、面積も広いこともあって、必ずしも参加率が非常に高いわけではない。
委員	校長先生が参加するかどうかを決めるので、校長先生も絶対ご招待してもらいたい。昔、オーケストラを聞いたときと違って、本当に楽しく子どもたちが楽しめるようなプログラムになっている。是非、参加率が100%になるように、努力していただきたい。
委員	滋賀次世代文化芸術センターでは、美ココロ・パートナーシップ事業において、びわ湖ホールを利用している。昔はびわ湖ホールも美術館も敷居が高く入りづらかった。小さい子どもは環境が大きい。知識を学ぶことも大事だが、感性を磨くということで、本物の演奏を聞く。何年も積み重ねてきたので、プログラムの質は高くなっている。美ココロの話もあったが、不登校の子ども達も、こういう機会だと来る。子どもたちが変わる瞬間があるが、それを校長先生や先生に見てもらいたい。普段の授業も大事だと思うが、素晴らしいホールを活かしたプログラムというのは、全国に

	<p>発信出来るのではないか。びわ湖ホールから遠い所は、びわ湖ホールの学校巡回公演を利用したらどうか。滋賀次世代文化芸術センターでは、プログラム支援やコーディネートをしており、色々な繋がりが滋賀県は本当によく出来ている。</p>
部会長	<p>ボランティアの育成のところ、22名参加となっているが、これについて何か聞いておられるか。</p>
委員	<p>様々な窓口がある。1回生ゼミや博物館関係の授業があり、自主的に参加したいという学生や卒業後も継続してボランティアしたいという学生も出てきている。</p>
委員	<p>ホールの子事業の企画の質も上がって来ているが、全学校にまで行き届いていないので、今後とも、広報を続けたいといけない。</p>
部会長	<p>先程の学校にアートがやってきたということで、学校と芸術家のすり合わせということで、図工科のネタ探しで利用されたと書いてあったのですが、現場ではどういうことか。</p>
委員	<p>事業を実施した学校に行き、その校長先生と話をした。普段、学校だけでは出来ないようなダイナミックなことができ、学校に来ていただけるのは大変ありがたい。出掛けて行くのは行きにくい、向こうから来てもらえるのであれば、学校側は調整は大丈夫ですとおっしゃっていた。27年度は2校だけだったので、もっともっと増やしていただけると良いと思う。</p>
部会長	<p>芸術家にとって、今後の活動についての広報にまで繋がっていないというのは、負担の部分があるのかなという感じがします。</p>
委員	<p>学校と芸術家とのミスマッチについては、芸術家は専門的な分野で話し、学校には学習指導要領に則ったカリキュラムがある。そこはお互いの、それぞれ持っている良さがあるので、事前にすり合わせをしながら、折り合いのつく所を見つけおくと良い。</p>
委員	<p>ホールの子事業について、芸術に対する感動の他に、ああいう会場でのマナーも醸成されている。あまり書いていないが非常に重要ではないかなと思う。そういうところも成果として見出していくべきである。</p>
委員	<p>先生が「静かに！動かないように！」と指示されていたが、始まったらみんな一生懸命に演奏会を聞いていて、やはり子どもたちが吸い込まれていくみたいなものがあるのだなと思った。</p>
委員	<p>良いものを見れば、この中に芽生えてくるのかなというのは感じました。</p>
委員	<p>昔の音楽鑑賞会のようにじっとしていなくてはいけないこともないし、「みんな歌おう」とか「手拍子しよう」といったようなムード作りも上手い。</p>
部会長	<p>やる側がこなれてきた。のせるのが上手。</p>

委員	みんな、のってくるのがわかった。
委員	お金が掛かっているのかもわからないが、催し物としては非常に良かった。
部会長	<p>次世代文化賞の受賞者展は、かなり程度が高かった。近代美術館もビックリするような展覧会になったと思う。びわ湖ホールで適当に並べられているより、ギャラリーであっても、美術館なら、4人か5人だったと思うが、非常にお互いが競い合う。そういう意味で、展覧会としては非常に高い、密度の濃い展覧会だったと改めて思う。びわ湖ホールの中で、ついに出して下さい、みたいな感じでは、作家にとっては良くない。それに比べて、次世代文化賞の美術館での展覧会は良かったなと思う。そういうチャンスを出るだけ与える。それが美術館の広報にもなり、作家にとっては近代美術館ギャラリーだったとしても広報活動ができる。是非、続けてほしい。</p> <p>「アートにどぼん」は来年から出来なくなるが、場所をどこかに移して、やっていただきたいが、例えば、新しくなった大津駅前の広場など、出来るだけ人が集まる場所でやると、逆に美術館もアピール出来る。少し切り口が違う形でやっていただいても良いのかなと。屋台などが出ても構わない。少し、賑わいが出てきている所でやって、それを繋げて、徐々に、商店街や県庁の方へも広げていく。そのような形は出来ないのかなと思う。検討していただきたい。</p>
委員	3月にやっていた次世代フェスティバルがなくなるのかとみんな凄く不安を抱いたが、今年は9月に開催した。毎年9月に開催するのか。
事務局	来年度については、関係者と協議中だが、出演者の都合等で9月開催は難しいと聞いている。違う時期になる可能性がある。時期をずらしてやることは考えているが、内容などについては、今年の状態も見て、見直しは図っていきたい。
委員	若手には活動する場がなかなかない。出身である滋賀県で活動の場を与えられるのは大変嬉しいので、是非、続けて行って欲しい。
委員	素朴なことだが、フェスティバルの名前が長く、インパクトがない。滋賀らしさがあまり感じられないので、何かサブタイトルでも、キャッチフレーズでも、あれっと思わせるような何かがあれば良い。
事務局	チラシを見ていただけると分かるのだが、一般向けには「びわこ☆アートフェスティバル」という名前にしている。広報等が十分出来ているかということはある。
委員	<p>若手ということや斬新な新しい力が出てくるのが、「びわこ☆アートフェスティバル」という名前では感じられない。悪い名前ではないと思うが、次世代の育成が目的なので、それをドーンと打ち出す必要がある。</p> <p>「アートにどぼん」という名称は面白い。これと同様に、正式名称でなくても、キャッチフレーズがあれば良い。若い人が出てきて、非常に斬新な物が出ていると言うが、うちの学生にこのチラシを見せても多分行かないと思う。</p>

部会長	今年で何回目か。
事務局	今回で6回目。
委員	展示の切り口なども少し工夫されると良い。
部会長	次世代文化賞は、今、美術、音楽だけで、出来れば幅を広げてということだが、その方法が難しい。色々な展覧会を見て回っているが、滋賀県人は、結構、京都でやっている。滋賀県では、見て回る人がいない。評論家も育てていない。いわゆる本当の意味でのアートフィールドで頑張っている若手の人というのが、まだまだ上がってこない。なおかつ他の分野をどうやって見つけるのかというところは、大きな課題である。これは文学も含むのか。
事務局	文化賞は、文学や学術も含まれている。
部会長	パフォーミングアーツとかダンスとかまでカバー出来る人がいない。メディアも滋賀県は少ない。京都は、色々な人が展覧会や活動をしているとわかるが、滋賀県ではわからない。
委員	この賞は、個人が応募するのか。
事務局	こちらから依頼した団体等から他薦である。
委員	どのように依頼しているのか。
事務局	市町長、市町の教育長、県の他課、地域の文化団体、県内の大学、関西、中部、首都圏の芸術系の大学に依頼している。
委員	選考方法が問題なのかと思った。
部会長	推薦を個人に依頼したら、個人だと責任も出てくる。団体だと、事務の人が誰かに聞いてという感じになる。物を書いていたり見ていたりする個人を見つけ出して、その人が若手を見つけ出していく。任命された方も一生懸命になると思う。
委員	各分野のキーになる人や分野ごとの新しい芽を見つける視点を持った人から推薦をしてもらわないと。
委員	そういうフィールドで活躍していたり、そういう場にいる人に聞けば、あの人！というなことが出てくる。
委員	各分野にそういうキーマンがいると思う。絵本の世界しか知らないが、絵本の世界では、その人に聞けば大体のことは分かるし、その人が決めたと言えば誰も文句は出ない。それぞれの分野にそういう人がいれば、個人に任せるというのも新たな方法として、一考に値すると思います。
委員	キーマンというと偏りというか派閥的なもの出て来るので気になる。
部会長	それは団体でも同じ。団体でも、自分のところから順番に上がって

	く。
委員	そのようにならないようにしなければいけない。
部会長	そうならないように。そこが難しい。
委員	個人だからと言って、それが出来るとは私は思わない。偏りが逆に強くなるんじゃないかなと。ちょっと気になる。
部会長	出来るだけ広く知っている人に選んでもらう、推薦してもらおうというのが1番良い。京都では過去の受賞者から何人かを推薦してもらおう。関係者に「誰かいませんか」と聞いてくる。もの凄い数の推薦がされる。それを事務局で整理するのが大変みたいだ。
事務局	この賞の事務処理体制は、非常に限られたマンパワーの中でやっているのだから、あまり大量に来ると、多分、処理できない可能性がある。また、公平性をどう担保するのかということ。その配慮が必要。他県でも色々取組があるので参考にしながら考えていきたい。
	議題3「県文化施設における次世代育成施策の実施状況について」
事務局	(事務局から資料説明)
部会長	3つの重点施策に対して、これだけのことをやってもなかなか見えてこない。内部でも多分、分かりにくく、われわれ委員もなかなか把握しにくいと思うが、ご意見をいただきたい。
委員	滋賀県は伝統芸能では国内有数の県だ。田んぼ体験だが、単に田植えだけを体験するのではなく、稲を植える前に豊作を願う行事や、終わった時の感謝の行事。そういう一連の行事も体験したらどうか。
部会長	そういう行事を見に行くとか。
委員	そういう行事とセットにすることによって、県内の文化というのが繋がらないかなと思った。 また、表舞台の企画が多いように思うが、公演が始まる前にリハーサル の場面を見て、裏方に非常に興味を持った。例えば、照明の技術。レバー 1つで朝から夜に切り替える。そういう裏方の仕事を見ることによって、 表舞台が分かる。それによって表舞台に関心を持ち感動を覚える。そのよ うなことが出来ないかと思っています。文化は、表舞台の人だけではなく、 裏方も文化に対して貢献している。必ずしも表舞台だけではない。裏 方あつての表舞台ですから。そのことが県内の若いこれからの世代に育っ ていくと、幅が広い文化が出来上がってくると感じた。
部会長	今の意見は、貴重な意見で、非常に賛成だ。特にアーティストなどに裏 方を知ってもらい、自分たちだけが主役ではないということを知ってもら うことが大事。書庫見学会は、面白いと思った。学芸員関係で美術館の裏 はよく見るが、そういう所を見せることは、非常に大事。先程、出ていま した田んぼの文化。これは確かに、伝統的な行事も色々残っている、滋 賀県ならでは出来ることだと思う。伝承というのを是非、考えていただき

	たい。
事務局	小中学校の美術の授業では絵を描いているばかりだった。絵を見ることで感受性を養うという意味があると思うが、説明が何も書いていない。この年になってこの絵はこういう事が言いたい、こういう趣旨で描いてあるというのを見て、そうなのかと感動した。小学生の時、そのような見方があると分かっていたら、もっと見たのにといい思いがある。今の小中学生の授業では、どうなのか聞かせたい。
委員	私たち大人が近代美術館に行って、自分だけだったら分からないことを、学芸員から話を聞くだけでとてもよく分かる。しかし、小学生はそこまで本物の美術作品を見て説明を受けるということは少ない。中学校に行くと、鑑賞領域と時間数も増えてくるので、説明を受ける機会はある。
部会長	高校になるとほったらかしで、感想を書きなさいと。
事務局	説明が書いていない理由として、先入観をもたすという話がある。
部会長	そこが、物凄く難しいところ。私の場合「まず見よ。そこで、自分と対話をしなさい。先入観を入れずに。」という。自分の感じ方を確認して行くように学生に1番に言うのです。先入観が入ってしまうと、そういう目で見てしまうので。
事務局	1つの例として絵の説明があれば、「この絵はどういうことなんだろう。」という目で見ようと努める。そういう知識がなければ普通に見るだけで、ただ「鳥が描いてある。」ということで終わるといこともあるのではないか。
部会長	それは、難しいところで、先に説明を受けて見るのか、それとも、何の説明も受けずに見るのか。
委員	滋賀次世代文化芸術センターの連携事業を見ていただきたい。美術館に子ども達は行かない。美術館に連れていく親と、連れて行かない親とでは連れて行かない親の方が圧倒的に多い。その中で、どのように体験させるのか。来てもらえないのなら、こちらから出掛けて行こうというのが、この仕組み。中間支援組織が間に入ってやっていくシステムは、日本でこれくらいしかない。その中で、美術館の作品、学芸員が学校に来るとい仕組み。そこで、鑑賞教育だけではなく、制作体験もプログラムの中に組み込んでやるという新たな仕組みです。これは、小学校、適応指導教室、不登校授業をしている教室、最近では、不登校児童の家まで行っている。さらに、その講師となる美ココロ・パートナーの育成もやっている。
部会長	そのことをアピールしたらどうか。
委員	まずは内部からですね。
部会長 委員	美ココロ・プログラムは、実施人数は少ないが成果が上がっている。滋賀の文化・芸術について様々な活動に参加しているが、外部の文化・芸術を紹介するというのが圧倒的に多い。もっと滋賀の文化をクローズアップするような視点を数%でもプログラムの中に入れられないのか。滋賀

	<p>県は古く幅広く厚みがあり、ラ・フォル・ジュルネのような西洋のものだけでなく、滋賀ならではのプログラムを作っていく時代にきている。</p> <p>アートマネージャー等の育成について、インターンシップ制度として各施設が導入すると単位として認定できる大学もあるので、大学生が参加しやすくなる。インターンシップとは別にプログラムがあると、学生が参加しにくいので検討していただきたい。</p> <p>私の専門分野はミュージアムボランティア。ボランティアが500名では少ない。この裾野をいかに広げていくのか、先程の発言のように、伝えられる人を広げていくことは非常に大事。そのような施策を、これからもっとやっていく必要がある。</p>
部会長	ありがとうございました。他には。
委員	子どもが最初に触れる芸術の1つは絵本なので、もう少し絵本という切り口であるとか絵本の原画展等があれば、親が文化に興味がなくても入りやすい。そういうキーワードや切り口で何か考えていただきたい。
委員	「子どものためのシェークスピアオセロ」の入場者数は少ない。中ホールでこれだけしか入っていないのかと。びわ湖ホールは、オペラを広めるために出来たホールで、これは演劇だが、子ども達に小さい頃からオペラを見てもらいたい。子ども達でホールをいっぱいにするために、子ども向けのシステムを作れないか。たくさんのキャストを呼んでいるのに、これだけの人数では。「おいしいおいしいクッキー」では、中ホールはいっぱいになったのか。真ん中に舞台と書いてあるのですが。中ホールの真ん中に舞台を置かれて、周りにお客さんが入ったのか。
事務局	公演の詳しい状況は今すぐ分からないので、調べておきたい。びわ湖ホールではシアターメイツ制度というのがあり、子どもに会員になっていただき、子ども向けのイベント等を行ったり、案内をしている。
委員	オペラは総合芸術で、歌、バレエ、劇がある。せっかく、びわ湖ホールがあるので、そのようなプログラムを作って、子どもたちに見ていただけたら良いので、検討いただきたい。
部会長	次年度から近代美術館は閉館するが、学芸員はアウトリーチ活動を中心に行うのか。
事務局	来年度から近代美術館は休館になるので、まず、工事のために収蔵品を移転させる業務がある。その業務はあるが、同時に、アウトリーチを中心に、新しい美術館に向けて期待を高めていきたい。特に、小さい子どもたちを中心に、県内広く回って行けないか検討している。
部会長	仮設展示等はしないのか。
事務局	仮設展示も考えている。例えば、大学の施設等や市町のホールを借用して、仮設展示をやるとか、ワークショップでこれらの施設に出向くことを検討している。
部会長	近代美術館の本物に触れるというプログラムが増えそうだ。
事務局	来る分が少なくなるが、出向いて行く分が増えていく。



委員	様々な町で展開していける。
事務局	そうですね。
部会長	近代美術館の宣伝をしないと。
事務局	大津にあるので、湖南の人は来たことがあっても、湖北の方の人はあまり来たことがないので、やはりまず知っていただいて「あっ、これおもしろいな」ということを広めていきたいなと思っております。
部会長	今、委員から西洋ばかりといことでしたが、ラ・フォル・ジュルネの参加人数は、増えているか。
事務局	増えてきている。今年度は、出演者の数が増えたということもある。年々、大変、盛り上がりを見せている。
部会長	アートマネジメント講座を開催されているが、現場となかなか結びついていかない。学んでも活躍する場がないのか。 県から事業を委託する等が出来ればいいのかと思う。若手作家が選ばれたら、マネジメントして、展覧会を企画する等。一連の作業をすることで、実践を踏んでいくのかなと思う。与えられたものではなく、そこで作っていくという体験をすることがこの分野では非常に大切な。
委員	サポーターもいわゆるお手伝いではなくもっと幅を広げて、色々な分野で働ける機会を作ってあげる。そういうサポーター制度を提案しているが、マネジメントとして大変なので、どこまで出来るかというのはある。
部会長	これだけやってきて、次のステップを踏んでいく時期にきている気はする。
委員	解説やフロアのマネジメントだけしかさせないということでは広がっていかない。もっと様々なサポーター制度があると思う。
事務局	美ココロ・パートナーシップ事業では、美ココロ・パートナーの育成過程の中で、マネジメントもやっている。びわ湖ホールの手伝い制度も、単に手伝いということではなく、応援団としてどんどん発信力をもっていくような形に出来ないのか考えている。先行している琵琶湖博物館のはしかけの制度、フィールドレポーターや、他の文化施設なども参考にしながら、より積極的に活動が出来るようにしていった方が良くと思う。
部会長	議題は以上だが、この部会に関係することなら、自由に発言いただきたい。
委員	先程、若手芸術家の育成というのがあったが、子どもたちにとって若手芸術家は、年齢も近く大変親しみやすい存在。若手芸術家が、制作に関して、学校に来てもらえるなら、学校現場としては大変ありがたい。担任がやっているよりも、専門的なことを言ってくると、子どもが凄く変わってくる。どんどん学校へ来ていただけると良い。

事務局	滋賀次世代文化芸術センターが、若手芸術家の方にもお願いして多くの授業を行っている。また、文化振興事業団の事業やびわこ☆アートフェスティバルの中でもやっている。学校側も忙しく、先生も手間を取られる面もあるので、手探りや紹介で広がっている。今後、どういう形で情報のやり取りを学校側とやっていくのが効果的なのかという点での助言をいただきたい。
委員	校長先生に言っていたのは勿論だが、校長先生が必ずしも音楽や美術の専門とは限らない。県に部会があり、小学校は図画工作部会、中学校は美術部会、高校は工芸部会というのがある。その会議の中でご説明すると、図工・美術の専門の教員が集まっているので、発信も出来る。
委員	学校のカリキュラムに入れるのが難しいのなら、学童クラブへ来てもらえると先生達が大変助かるし、子ども達も喜ぶ。そこその人数はいるので、学童クラブへ出かけていくところから、子ども達が「学童にこんな先生が来た。」と学校で話すことで、カリキュラムに繋がることもあるのではないか。
部会長	学童クラブまで行ける人がなかなかいない。
委員	でも、行きたい演奏家はたくさんいると思う。
委員	子どもと接すると、色々な刺激を絶対に受けるので、マイナス面はないと思う。先日、絵本作家を呼んでワークショップを開催したが、子どもたちの目の前で描いてくれるので、子ども達は大歓声です。
部会長	多くのことをやっているなので、今年度はこれに絞ったとかメリハリをつけても良い気がする。例えば、今年度はこれにスポットを当てましたといったように順番に光を当てていき、広報活動もそこに集中的にやることで、効果が出る気がする。
委員	選択と集中ですね。
部会長	滋賀県は情報が集中する所がないので、なかなか広報ができない。京都市は市バスを使って、毎月上手く広報している。それを通勤途中の人たちが見て、情報が伝わる。そういう場が滋賀県の場合はない。
委員	JR とか。
部会長	そうですね。JR の駅で、広報活動をやってもらおうとか。バタバタ入れ替わるデジタルサイネージを使ってアピール出来るのかなど。広報活動にしても、なかなかアピール出来ないのは、もったいないという気がする。
委員	これだけやっているのに学校関係者に伝わっていないと改めて感じた。重点施策として、まず内部の情報をしっかりと伝達する研修などを考えることが必要である。
委員	今回資料を事前に送ってもらって、初めて知った事業がたくさんある。

	<p>学校に置いておくだけでは取らないので、例えば、あがっている1つの項目だけでも、PTA会員数だけでも配っていただくと、興味のある保護者は、また行ってみようかなと思う。おそらく、知らされていないということが現実にある。</p>
部会長	<p>滋賀県では町内会のシステムは、まだあるのか。</p>
事務局	<p>地域的に色々だと思う。</p>
事務局	<p>学校関係では、教育委員会と連携をとり、先ほど御紹介のあった部会も活用していきたい。PTA向けに配布される資料も作っている。2月号ではホールの子事業について、記事の掲載を依頼しようと思っている。保護者向けのアピールも今後、組織的にやっけていかないといけない。</p>
部会長	<p>広報活動の戦略を重点的に考えていただきたい。項目だけでもかまわないので。それによって違った効果が出てくるかと思う。</p>